

¶retを用いた挿入句をめぐって

——主に物語のテキストにおける役割について——

田原 いずみ

はじめに

本論ではフランス語のテキストで比較的頻繁に見受けられる ¶ret long (または ¶ret cadratinとも呼ばれる。以下 ¶retと記す) の機能、そしてテキストにおける役割について考察し、それが依存する発話や語、さらに ¶retが導く挿入句がテキストとどのような関係を持ち何を伝達しているのかを明らかにしたい。その中でも特に物語のテキストにおいて ¶retが導入する挿入句の役割に注目し、一見類似しているように見える丸括弧付きの挿入句との共通点、そして相違点を比較検討することにより、特に物語における「声」の表れという点でのこの二つの記号の相違点を明らかにし、¶retの機能をさらに明確にしたい。

¶retを用いた挿入句をめぐって

diretを用いた挿入句をめぐって

一. *diret*を伴う挿入句の特性

一. では、*diret*を伴ってどのような要素が発話、またはテキストの中に挿入されるのか、そしてその挿入句が前に置かれた要素や埋め込まれた発話に対してどのような役割を果たしているのかという点を、本論の主な分析対象である物語のテキストからの例を分析することによって考察してゆく。

まず始めに、発話の内部に *diret* で導かれた名詞句が挿入されている例を挙げることができる。(1)の例では、発話の中に *diret* によって名詞句、そして *virtuelle* を挟んでその名詞句を修飾する形容詞的に用いられた過去分詞が挿入されている。この例では、挿入句が置かれている発話の最後の名詞 *son pain* をより詳細に説明するために、それと同格の *un pain* から始まる挿入句が用いられている。また、(2)では、*diret* で挿入された挿入句の中に四人の音楽家の名前が並列されており、これは直前に置かれた名詞 *la musique*、つまり画家のドガが好んだ音楽の詳細としてドガが特に好んだ作曲家の名前を提示する役割を持っていると解釈できる。

- (1) *Économiste, elle mangeait avec lenteur, et recueillait du doigt sur la table les miettes de son pain, — un pain de douze livres, cuit exprès pour elle, et qui durait vingt jours.*

(Flaubert, G., « un cœur simple », in *Trois contes*)

- (2) En outre, Degas a une passion pour la musique — Mozart, Gluck, Massenet, Gounod — c'est sa première et principale raison de fréquenter l'Opéra (…). (Laurence, C., *La petite danseuse de quatorze ans*)

名詞句と同じように頻繁に見受けられるケースとしては、(3)、(4)に見られるように、副詞句が *tout* を用いた挿入句として発話内に現れる例を挙げることができる。(3)の挿入句は *depuis* と *jusqu'à* から始まる二つの前置詞句、そしてそれぞれに共通して含まれる時刻の表現に補足情報を付加するために読点を挟んで無冠詞の名詞 *heure* が置かれ、先の時刻の意味するものを説明する役割を担っている。また、(4)で *tout* に囲まれて発話の従属節の中に挿入されているのは *si* で始まる副詞節である。この場合も、挿入されている位置や挿入句の性質は異なるが、(3)の挿入された前置詞句と同様、発話で用いられた述語動詞または関係詞節内の動詞が表す状態や行為に補足的な情報を補っていると言える。

- (3) Il comprenait — depuis huit heures du matin, heure réglementaire à laquelle se levait Phileas Fogg, jusqu'à onze heures et demie, heure à laquelle il quittait sa maison pour aller déjeuner au Reform-Club — tous les détails du service, le thé et les rôties de huit heures vingt-trois, l'eau pour la barbe de neuf heures trente-sept, la coiffure de dix heures moins vingt, etc. (Verne, J., *Le tour du monde en quatre-vingt jours*)
- (4) Ceux qui avaient l'honneur de le connaître un peu plus que les autres attestaient que — si ce n'est sur ce *tout* を用いた挿入句をめぐって

tiretを用いた挿入句をめぐって

chemin direct qu'il parcourait chaque jour pour venir de sa maison au club — personne ne pouvait prétendre l'avoir jamais vu ailleurs. (Verne, J., *Le tour du monde en quatre-vingt jours*)

さらに、(5)が示すように、関係詞句が挿入句として tiret に導かれて現れる例も見出すことができる。

(5) Pour cent francs par an, elle faisait la cuisine et le ménage, cousait, lavait, repassait, savait brider un cheval, engraisser les volailles, battre le beurre, et resta fidèle à sa maîtresse, — qui cependant n'était pas une personne agréable. (Flaubert, G., « un cœur simple », in *Trois contes*)

この例では、発話の末尾に挿入されている関係詞節は、読点を挟んで tiret の直前に置かれた名詞句 sa maîtresse を修飾している。この場合も、挿入句の役割は、直前の名詞句が示す登場人物に関する情報・説明を付加することであるとと言える。(1)、(3)、(4)における挿入句についても共通に言えることだが、(5)で挿入されている関係詞節は、通常、直接または読点を挟んで名詞句に後置されるものであるので、tiret に導びかれて挿入される必要はないはずである。この発話の場合も、tiretを除いたとしても、直前の sa maîtresse を修飾する関係詞の説明的用法として問題なく解釈することができる。その場合も、tiretで導入された挿入句としての場合と同様に、関係詞節は(1)の登場人物に関する説明を加えているという役割を果たしていると考えられるだろう。このように、特に関係詞節のような元々名詞句に情報を付加する役割を持つ要素に関する場合、それが tiret を用いて挿入句という形で用いられ

る意味を考える必要があるだろう。この点に関しては、二一で *Et* 自体が何を伝達しているのかということを考察する際により詳しく論じていくが、ここでは *Et* を伴う挿入句には単にそれが含む内容を発話全体、または発話の中のある要素に付加する以上の機能が備わっていることが明らかであることを認めることができる。

ここまでに、挿入句として何らかの節または句が発話の異なる位置に挟まれている例を見てきたが、最後にある発話の中に別の完全な文の形式を持つ発話が *Et* を伴って挿入されているケースを挙げる。*Et* によってある発話内に挿入される発話には、挿入された発話が小文字または大文字で始まっているか、またはなんらかの接続表現を伴っているかどうかという点で、異なるタイプの発話の形式を見出すことができる。まず、次の(6)は、小文字で始まる発話が挿入されている場合の例である。

- (6) Un jour — elle avait alors onze ans — comme elle passait par ce pays, elle rencontra derrière le cimetière le petit Chouquet qui pleurait parce qu'un camarade lui avait volé deux liards.

(Maupassant, G. de, « La Rempailleuse », in *Contes de la Bécasse*)

この例では、挿入されている発話 (*elle avait alors onze ans*) は、ある日、という曖昧性を持つ意味で用いられている *Un jour* という表現の直後に置かれ、時間的な曖昧性のある程度取り消し、年月日や時刻までは詳細でないものの、*elle* で示された登場人物が何歳だった時かという時間的な情報を補足的に付加しているものと解釈できる。また、小文字で始まる発話が挿入されている場合は、次の例に見られるように、文頭に接続詞を伴う例を頻繁に見出すこと

tiret を用いた挿入句をめぐって

tiretを用いた挿入句をめぐって

ができる。最も頻繁に見受けられるのは、(7)が示すように、接続詞 et を文頭に持つ発話が挿入されるケースである。

- (7) La pendule, au milieu, représentait un temple de Vesta : — et tout l'appartement sentait un peu le moisi, car le plancher était plus bas que le jardin. (Flaubert, G., « Un cœur simple », in *Trois Contes*)

この例に現れる挿入句は、登場人物である Madame Aubain の家の比較的細部と言えるいくつかの部分の描写の後に置かれている。ここでは、細部の描写の後のいわばまとめとして家全体に関する特徴が説明されているのだ。この挿入された発話が、小文字で始まっていること、そして特に et で結び付けられていることから、挿入句の部分は、それが挿入されている発話にある程度依存しており、この二つの発話の間の関係性は強いと言えるだろう。さらに、挿入句の直前に置かれた発話を見ると、文末に *point-virgule* (;) が置かれている。*point-virgule* は、独立した文の間に置かれ、その二つの文を何らかの論理的な関係で結び付ける役割を果たすものである。このことから見てもこれら二つの発話は相互に結びついており、また挿入された発話は直前に置かれた発話から意味的に完全に自立しているものではないことが明らかである。ここで述べている挿入された発話の非自立性とは、文法的なもののことではないことも付け加えておかなければならない。ここでは、それは発話者(ここでは書き手)が物語を作り上げてゆくための論証の中での発話の間にある関係性に基づくものだと言えるだろう。また、*point-virgule* と *tiret* が共起できると言うことは、それぞれが持つ役割が重複しておらず、それぞれが違う役割を担っているということも示していると考え

られる。この点に関しては、*tiret* の役割を検討する二つでより詳しく取り上げるが、この例では *point-virgule* が示す曖昧な関係性（前後の二つの発話の間の何らかの関係）をより明らかな関係性（上で解釈したように先行するコンテキストで表されたものの「まどめ」を提示しているということ）で捉え直していると言えるのではないだろうか。

ここまでで見た（1）から（7）までの例における *tiret* に導かれた挿入句は、発話または句、節など性質の異なる要素を挿入しているものの、全て小文字で始まっており、発話の内部に埋め込まれているものが多い。または、別の発話の後、つまり完全に外部に置かれていたとしても、（7）のように、*tiret* に導かれた発話が小文字で始まる接続詞 *et* で直前の発話と結び付けられており、さらに、直前に置かれた発話の最後には *point final* ではなく *point-virgule* という二つの発話を何らかの関係で結びつける句読点が置かれているのを見ると、*tiret* で導かれた発話がその直前の発話から完全に独立しているとは考えにくい。この点に関して、*tiret* の持つ機能として、Doppagne (1978: 25) は“(…) le *tiret* affirme souvent une valeur de raccord ou de rappel.”と述べている。以上のことを考慮に入れると、*tiret* が導入する挿入句は、それが文を挿入しているにしても、文よりも小さな単位を導入しているにしても、コンテキスト内のある発話に依存し、その一部をなすとと言えるだろう。François (2011) は“(…) le *tiret* fonctionne comme un signe de phrase.”また“*tiret* impose l'intégration syntaxique de celle-ci dans la phrase”と述べて“*signe d'énonciation*”であるとする丸括弧 (parenthèses) と対立させている。この見解は本論でつづまげに挙げた例にも当てはまり、*tiret* はやはりそれ自身が独立した要素として成立している句や文を導入しているのではなく、ある発話への依存を表していると考えられる。François (2011) は *tiret* が用いられている挿入句の興味深い例を多数挙げているが、それらの例においては、上で挙げた（2）と同様に固有名詞が挿入されている一例を除いて、上の（1）そ

tiret を用いた挿入句をめぐって

uretを用いた挿入句をめぐって

して(3)から(7)と同様に全て小文字から始まる名詞、発話、関係詞・副詞・前置詞節、シェロンディフが挿入されている。確かに、本論のために調査した例においても、大多数は小文字から始まり、その点で非自立性を示していると考えられるものであるが、これがuretによって発話が挿入される場合に必ず見られる特徴であるかというところではなく、稀ではあるが(8)のように挿入された発話が小文字で始まるケースも見出すことができる。

- (8) Les adieux furent de ce côté plus long et plus tendres qu'ils ne l'avaient été de l'autre, non pas que M. D'Artagnan n'aimât son fils, qui était sa seule progéniture, mais M. d'Artagnan était un homme, et il eût regardé comme indigne d'un homme de se laisser aller à son émotion, tandis que Mme d'Artagnan était femme et, de plus, était mère. — Elle pleura abondamment, et, disons-le à la louange de M. d'Artagnan fils, quelques efforts qu'il tentât pour rester ferme comme le devait être un futur mousquetaire, la nature l'emporta et il versa force larmes, dont il parvint à grand-peine à cacher la moitié.

(Dumas, A., *Les trois mousquetaires*)

この例では、uretを伴った発話は、直前に置かれた発話 (Mme d'Artagnan était femme et, de plus, était mère.) が表す事柄(タルタニャン夫人が女性であり母であること)に起因するタルタニャン夫人の振る舞い(息子との別れに際して大いに涙したこと)、そして、主人公であるタルタニャンが母親の涙を見て自身も涙を流したことが描かれている。このことから、uretの前後の二つの発話には意味上強い因果関係があることが明らかである。しかしながら、

Directで導かれた発話が大文字で始まっていることから予想できることであるが、Directの直前に置かれているのは発話の終点である point finalであり、つまり、(1)そして(3)から(7)で挙げた挿入句の例と異なり、Directはある発話の内部に別の発話または句、節などを挿入しているのではなく、独立した発話の後に別の独立した発話を導入しているのである。つまり、この場合はある発話の内部に別の要素を導入しているわけではないため挿入句であるとは言えないが、多くの場合ある発話の中に何らかの要素を挿入するという機能を持つDirectが、通常何も介入せずには並べられるはずの独立した発話の間に現れるということは非常に示唆的である。さらに、次の(9)も同様の例であるが、これまでの例にはない点を含んでいる興味深い例である。

- (9) Bientôt elles aperçurent la manière et l'atteignent : Mme Lefevre se pencha pour écouter si aucune bête ne gémissait. — Non — il n'y en avait pas : Pierrot serait seul.

(Maupassant, G. de, « Pierrot », in *Contes de la bécasse*)

この例では、まず、Nonという拒絶や不一致を表す間投詞がDirectによって導入されている。また、(9)も含めたこれまでの例は全て物語のテキストからの例であったが、(9)以外はDirectを伴う挿入句はすべて語りの文(語り手に属する発話)に現れるものである。それに反して、(9)ではDirectに挟まれているNonはその後に続く二つの発話と共に登場人物 Mme Lefevre の中にこの場面で生まれた思考を表す自由間接話法であると解釈できる。そしてこの挿入されたNonは大文字で始まり、それを挿入するDirectの直前には前に置かれた発話が閉じられたことを示す

Directを用いた挿入句をめぐって

directを用いた挿入句をめぐって

point finalがある。このことから、「Non」以下の部分は次のpoint finalまで一連の独立した自由間接話法に置かれた発話であると言える。ここで興味深いのは、自由間接話法が現れる際、普段はdirectで導入される必要はなく、この例でもdirectを削除しても発話の解釈は変わらないということである。さらに、この挿入句に続く発話(roy en await pas : Pierrot serait seul)を含む自由間接話法であると解釈される部分全体ではなく、間投詞のNonだけがdirectに挟まれているのだ。このような例を考慮に入れると、上の(1)から(8)に見られるように、directを伴う挿入句が、それが埋め込まれている発話または直前の発話で表されている事柄により詳細な情報や補足的な情報を付加しているとは必ずしも言えないことが分かる。この点は次の二でさらに掘り下げていく。また、(8)と(9)での直前の発話との間に統語的に依存していないdirectを伴って挿入された発話を見ると、directが導く挿入句は必ずしも別の発話に組み込まれている必要がないことが明らかになる。この点も続く二で、directの役割について検討する際にさらに考察する。

一では、特に物語のテキストにおいてdirectによってどのような要素が挿入されるのか、そしてその挿入句の直前に置かれた句や発話とどのような関係にあるのかを例を挙げて考察した。その結果、directに導かれて挿入される要素には、名詞句、前置詞・副詞節、文、そして間投詞が見られ、ある種類の品詞や節などに制限されているということはないことが明らかになった。また、それらの挿入句の中には、発話の内部に挿入された挿入句が、発話内のある要素に、または発話全体に追加情報や詳細、説明を付加している例が多く、その場合、挿入句は統語的にも意味の上でも挿入句が挿入された発話に依存していると言える。そして、文が挿入される場合には、挿入された文は多くが小文字で始まっていること、そして文頭にeが付く例が多いことが分かり、また挿入句の直前にpoint-virguleが置

かれる場合があることを見ても、そこには密接な関係が見て取れ、挿入句には自立性は与えられていないことがわかる。しかし、本章の最後で取り上げた(8)と(9)が示すように、統語的に直前に置かれた発話に対して自立していると考えられる挿入句が E_{int} によって導かれ得るのも事実である。このことから、挿入句の非自立性は強い傾向ではあるが、必然的なものではないと考えられる。また、特に(5)が示すように、 E_{int} を除いても、そこに句があることに問題が起らないような、言い換えれば、 E_{int} がない方がむしろより普通に見える形である例もある。このことから、 E_{int} は、上で挙げた例のうちの多くでそう認められるように、ある発話にある情報を付加するという機能を持つということが頻繁に見受けられるが、それだけが E_{int} の果たす役割であると言えないことが明らかである。次の二.では、さらに E_{int} の機能、そして発話中、テキスト中で果たす役割について考察してゆく。

二. E_{int} の伝達するもの

一.では、 E_{int} を伴ってどのような要素が発話内に導入されるのかと言うことを実例を分析しながら観察し、引用した例に現れる E_{int} に導かれた発話がテキストにおいて、特に直前に置かれた名詞や発話などに対して何を示しているのかという点からも考察をした。二.においては一.での考察をさらに発展させ、二一.一.で E_{int} 自体がどのような機能を持っており、テキスト中でどのような役割を担っているのかについて考察し、二一.二.で E_{int} と同様テキスト中で挿入句を導く丸括弧と比較することによって E_{int} を伴う挿入句の特性をより明らかにしてゆく。

E_{int} を用いた挿入句をめぐって

tiretを用いた挿入句をめぐって

二一・ tiret の機能

一・では、物語の語りの文に現れる tiret の例を小説から引用し、分析したが、二一・では、tiret の用いられ方について物語のテキストにおける用法に偏らないより一般的な考察をするために、まず新聞や雑誌からの例を挙げ、一・での分析結果と合わせて考慮に入れ、そこから tiret が何を伝達し、どのような機能を持つのかについて考えたい。

- (10) A l'initiative de sept syndicats – ils ont envoyé leur préavis directement au ministre de l'intérieur Christophe Castaner –, les sapeurs-pompiers doivent débiter, mercredi 26 juin, une grève prévue pour durer jusqu'au 31 août. Place Beauvau, on se veut rassurant : « Le mouvement n'aura pas d'impact sur la prise en charge de nos concitoyens. »
(*Le Monde*, 24.06.2019)

(10) において、tiret によって挿入された発話は、直前と直後の句で表現されている「七つの消防士の労働組合によって後日ストライキが行われる」ことがすでに内務省に予告されているという情報を補足していると解釈することができる。一・で観察したように、tiret によって導かれた挿入句の内容が直前の名詞や発話の示すものや事柄に關する詳細や補足情報を付加するということは、tiret の用法の中では最も頻繁に見出せるものである。

(11) Dimanche 30 juin aura lieu à San Francisco la Gay Pride 2019 (la Marche des Fiertés de Paris se tiendra la veille) , et Google — un des plus gros employeurs de la région (20.000 « googlers » dans la Silicon Valley — est un de ses sponsors. Ce que contestent près d'une centaine de ses employés LGBT, qui ont adressé une pétition aux organisateurs de la Marche. (*L'Observateur*, 26.06.2019)

(11) においても同様に、*titet*に挟まれて挿入される名詞句は直前の Google という会社がこのコンテキストで現れる際にどのような意味を持つものとして捉えるべきかということを説明する役割を果たしていると解釈できる。この場合も、大きな意味では(10)と同様に、直前に置かれた要素に挿入句が説明、詳細という情報を加えていると言えるだろう。

(12) Par ailleurs, on remarque la présence du superbe — et malheureusement peu vu en salles — *Spiderman : New Generation*, dans la catégorie Meilleur long-métrage d'animation. Dans ce dessin animé très inventif et moderne, on découvre que SpiderMan existe sous différentes formes dans des dimensions parallèles, dont un adolescent métisse new-yorkais, qui est le personnage principal. Une nomination pleinement méritée.

(*Marie Claire*, 22.01.2019)

(12) に見られる挿入句は、説明や詳細というより、単に新たな情報を発話内に導入していると言えるだろう。この *titet* を用いた挿入句をめぐる

*titret*を用いた挿入句をめぐって

の場合は、この挿入句がなくても読者にとって直前に置かれた表現や発話の解釈が困難になることはないが、発話は当然この挿入句があることでより多くの情報を伝達しており、この記事で取り上げられているアニメーション映画が素晴らしい作品である反面映画館では残念ながら観客をあまり集めなかったという情報を付加している。このように発話が伝える主な内容に反する事実を *titret* で挿入し、同一の発話の中で2つの相反する情報の対比を明らかに提示することができるのである。

(10)、(11)、(12) においても、一・で挙げた物語のテキストからの *titret* の例の多くと同様に、*titret* を伴う挿入句は直前の表現や発話の内容に対して詳細、説明、補足情報を付け加えていると解釈できる。しかし、一・で述べたように、本論では *titret* の役割はある発話の伝達する主要な内容に単に副次的な情報を付け加えるだけではないと考える。

次に、これまでに挙げた例の中に現れる *titret* を伴う挿入句の内容がコンテキストの中でどのような役割を担っているかについて考察したい。まず、(10) においては、問題の挿入句をその内部に含んでいる発話の内容に挿入句はさらに情報を付け加えているが、この付加された情報は「ついでに述べておく」ような削除してもよい重要度の低い情報ではなく、また別の発話としてではなくこの場所に挿入されることにより、必要な情報が一つの発話においてまとまった形で伝えられている印象を与えていると言えるのではないだろうか。一・で挙げた物語のテキストからの例の中でも、*titret* によって挿入された句が伝える情報が単なる副次的なものではなく、物語の中で重要な情報であることを認めることができる例がある。例えば、一・では、(1) の例において、*titret* が導入する挿入句 (— *un pain de douze livres, cuit exprès pour elle, et qui durerait vingt jours.*) はその直前に置かれた *son pain* が指すものを詳細

に説明していると解釈したが、挿入句の後半部分 (et qui durait vingt jours.) じゅむの物語の主人公の Felicie () の例では elle で示されている) の儉約家ぶりがどれほどのものであったかが具体的に示されている。この挿入句の内容は、この引用部分が現れる物語の冒頭に近い部分で読者が Felicie という登場人物を理解するのに重要な役割を担っているのである。また、同じ作品からの引用である (5) においても同じようなことを指摘することができる。この例に現れる turet を伴う挿入句 (… sa maîtresse, — qui cependant n’était pas une personne agréable.) は、この物語の主人公である Felicie が使用人として働く家の Madame Aubain という女主人を示す “sa maîtresse” にかかると関係代名詞節であり、この引用部分は物語の冒頭、つまり、読者がまだ各登場人物の性格などを知らない状態で現れる。この挿入句は物語の冒頭で「オーバン夫人は感じの良い人ではなかった。」という情報を読者に与えており、Felicite が生涯仕え続けるオーバン夫人が Felicie の苦労の原因の一つとなっていくことを予告していると言えるだろう。つまり、この挿入句はこの物語の続きについて読者が予想するための重要な情報をもたらしていると言え、そのことにより読者の好奇心を刺激するのではないだろうか。このことから、この挿入句は物語の中で重要な情報をもたらしていると考ええる。

次に (11) では、Google という会社は知っていても、その会社がなぜ Gay Pride というイベントのスポンサーになっているかの関連性までは知らない読者の理解を助ける情報が turet によって挿入されている。ここでは挿入句は読者が持ち得る疑問に先行して答えるという役割を持っていると言える。また、後続の発話 (Ce que contestent près d’une centaine de ses employés LGBT, qui ont adressé une pétition aux organisateurs de la Marche.) においては「約一〇〇名の Google 社の LGBT の社員」と言う情報が現れるので、先行する文脈において turet を伴う挿入

turet を用いた挿入句をめぐって

thatを用いた挿入句をめぐって

句が導入する「Googleはシリコンバレーの最大の雇用先である」と言う情報はこの後続の発話を読者が問題なく理解するためにも重要であると考えられる。一.において引用した例においても、(1)、(2)、(6)などでは、挿入句の内容が直前に置かれた表現の内容をより詳細に説明しており、(11)と同様に、直前の表現が現れた時点で読者が持ち得る疑問に先行して答えていると言え、やはり読者の理解を円滑にしていると考えられるのではないだろうか。そこから、これらの例のthatに導かれた挿入句は読者にとって重要な情報をもたらしていると考えることができる。また、(12)については、上で述べたように、挿入句の伝達する情報は、その挿入句を含む発話自体が伝達する内容と対比が生まれることで情報としての価値があると思われることから、やはり挿入句として発話内に現れることに意味を持つ情報であると言える。

ここまでで観察をしてきた例で明らかになったように、thatを伴う挿入句の内容が発話に何を付け加えているかと言う点では、新情報、補足情報、詳細、説明の付加などそれぞれのケースにおいて様々であるが、それらは発話に現れる情報にさらに詳細や説明を同じ発話内で加えることによって発話の伝達する情報に厚みを与え、さらに読者の理解を効率的に促したり、物語にとっての重要な情報を与えて読者の好奇心を刺激したり、発話内に現れる情報に対して読者が持ち得る疑問に先行して答えたりすることによって、単なる補足情報の付加だけではない重要な役割を果たす情報を与えているのである。さらに、次の例に見られるように、thatを伴う挿入句が発話全体が伝える情報の主要な部分を担っているケースも見いだすことができる。

(13) Le député épingle le ministre de l'Écologie, François de Rugy, venu en voiture alors que son ministre se

trouve à 600 mètres, « huit minutes à pied ». Il interpelle Sibeth Ndiaye – les bureaux de la porte-parole du gouvernement se trouvent à 1100 mètres, « quatorze minutes à pied, quatre minutes à vélo ». « Je vais au Sénégal », esquivé-t-elle. (L'Observateur, 26.06.2019)

この例で *trêt* に導かれた挿入句を含む 2 つ目の発話の主な部分は非常にシンプルな内容を伝えている (Il interpelle Sibeth Ndiaye)。だが、もしこの発話がこれだけで終わっていたら、読者は前の文章との繋がりがよく理解できず、それに続く内容を求めるだろう。ここでさらに必要となる詳細情報を提供しているのが挿入句であるといえるのではないだろうか。この例が示すように、*trêt* を伴う挿入句はテキストの内容、読者の理解のために重要な情報をもたらすことができるのである。⁽²⁾

二. で挙げた (10) から (13) までの例、そして二. で再び言及した一. からの物語のテキストからの例に見られるように、*trêt* を伴って現れる挿入句は、それぞれの文脈においてそれが表す情報がどんな役割を果たしているかは様々であるが、そこにあってもなくても良い重要度の低い情報を付け加えているのではなく、テキストの中で読者にとって有用であり、または物語、テキストの筋を効果的に提示するような情報を付加するという機能、役割があることが分かった。

ここで、一. においてある発話に組み込まれておらず、独立しているという共通点を持つ例として挙げた (8) と (9) についてここで再び検討し、さらに *trêt* の機能を明らかにしたい。まず、この二つの例の *trêt* を伴う挿入句には、挿入句が大文字で始まっており、(8) では挿入句が独立した一つの発話、(9) では独立した発話である自由

trêt を用いた挿入句をめぐって

Directを用いた挿入句をめぐって

間接話法の文の文頭に置かれた間投詞となっているという特徴を見出すことができる。一、ですでに述べたことだが、これらの例における挿入句となつてゐる表現または発話は、もしDirectを除いても、問題なく成り立つ。そのことから、このようなケースでは挿入句の存在自体が重要な役割を担つてゐると考えることができる。本論では、このような場合視覚的にも訴えるDirectの存在が挿入句を讀者にとつて他の表現や発話より顕著なものとして目立たせる役割を果たしてゐると考える。Directによつて挿入句の内容は讀者にはより印象的に提示されるのである。一、ですでに述べたように、(8)ではDirectが挿入する発話は直前の発話が示す「タルタニヤンの母親が女性的でさらに母性のある人である」という事に起因して母親がタルタニヤンの旅立ちに際し多くの涙を流した事、そしてタルタニヤン自身も涙を隠すことができなかつたことを単なる事実としてというより、Directで目立たせ、より印象的な形で提示してゐる。そのことにより、讀者はより強い印象を持つてその場面での登場人物の感情を読み取ることができると言えるのではないだろうか。また、(9)は自由間接話法に置かれ登場人物の思考を表す発話の文頭の「Non」という間投詞のみがDirectに囲まれてゐるという特殊な例であるが、ここでは登場人物のMme Lefevreの思考の中でも発話が伝える情報が最も凝縮されてゐると言える文頭のNonの部分のみをDirectで囲んで、その情報が讀者の目に飛び込むような効果をあげてゐると考える。以上で考察したように、テキストにおいての用いられ方によつては、Directは挿入句の情報を他の情報より目立たせるという役割を持つことがあるということが明らかになつた。別の見方をすれば、このような場合Directは発話者、つまり作者にとつてはすべての情報を同じトーンで提示するのではなく、時にはある情報を讀者にとつてより印象に残る方法で提示するための手段であるとも言える。

二、では、雑誌や新聞から引用したDirectに導かれた挿入句の例を一、で挙げた物語のテキストからの例と合わせ

て考察し、*Étêt*が物語やテキストの内容に対して単なる補足的、副次的情報を付加しているのではなく、読者が持ち得るだろう疑問を解消するなど読者の理解にとって有用であること、さらにテキストの中で重要性を持つ情報を与えるということが、また特に物語のテキストにおいては伝達する情報を他の情報より印象的な方法で提示するという機能を持つことが明らかになった。二二二では*Étêt*の特性をさらに観察するために、丸括弧 (*parentheses*) の特性との比較検討を試みる。

二二二 丸括弧付きの挿入句との比較

テキストにおいて、挿入句を導く*Étêt*と類似していると思われるものに丸括弧 (*parentheses*) を挙げることできる。ここでは田原 (2019) で検討した丸括弧付き挿入句の特性と比較することによって、*Étêt*を伴う挿入句の特性をより明らかにしてゆきたい。

田原 (2019) では、物語のテキストの例としてフロベールの *Madame Bovary* を挙げ、主にその中で用いられている丸括弧付き挿入句を物語のテキストでの役割について考察した。その際に物語のテキスト以外のテキストで用いられる丸括弧付き挿入句と比べることにより、物語のテキストにおける解釈の特有さを際立たせたが、まず、ここでも新聞や雑誌という一般的なテキストに現れる場合の*Étêt*を伴う挿入句と丸括弧付き挿入句の機能を比べる。

次に引用するのは、雑誌や新聞で用いられた丸括弧付き挿入句の例である。

- (14) Maurice Béjart (1927-2007) était le chorégraphe de son époque le plus connu du grand public franco-

Étêt を用いた挿入句をめぐって

tiretを用いた挿入句をめぐって

phone.

(*Le Monde*, 08.04.2018, 田原 (2019: 3) による引用)

- (15) Au moins quatre personnes ont été tuées et d'autres blessées samedi dans le centre-ville de Münster (nord-ouest de l'Allemagne) , a annoncé la police allemande sur Twitter.

(*Le Temps*, 07.04.2018, 田原 (2019: 3) による引用)

- (16) Ce qui n'empêche rien. Michelle Dockery est en ce moment à l'affiche de *The Sense of an Ending* (*A l'Heure des souvenirs*) , film de Ritesh Batra d'après Julian Barnes, avec Charlotte Rampling.

(*Le Temps*, 07.04.2018, 田原 (2019: 4) による引用)

(14) では Maurice Béjart という人名の直後に置かれ、丸括弧に挟まれてその人物の生誕年と死去年を提示しており、(15) では直前に置かれた地名を地理的に説明する名詞句、(16) では直前に置かれた映画の原題のフランス語でのタイトルが提示されている。これらの丸括弧が導入する挿入句では、それを含む発話の主題にとって重要な情報ではないが、読者の理解を促したり、読者が抱く可能性がある疑問に答えたりする内容が伝達されている。そこから、田原 (2019: 4) では (14) から (16) を含む物語に属さないテキストに用いられる丸括弧付き挿入句の機能については「名詞句に依存して丸括弧付きの表現が付けられている場合、その中に取り込まれた情報は発話が伝える情報の重要度で言えば、他の情報より低く、核心的な情報ではないと言えよう。上で述べたように、そのうえで読者の

理解を助けたり、深めたりするという有用性を持つことも丸括弧に入っていることで示されている。」と述べた。

ここで、二一・一で挙げた(10)、(11)、(12)のtiretを伴う挿入句の新聞、雑誌からの例と上記の丸括弧付き挿入句の共通点としては、読者が発話の中の要素や発話全体、またテキストをよりよく理解するのを促す、または読者が抱く可能性のある疑問に先行して答えるような情報を追加するという点で有用な情報をもたらすということ挙げることが出来る。ここでは、これらのタイプの挿入句に発話者(書き手)の発話やテキストが読者にとって生む効果をより高めるという意図を読み取れると考える。François (2011:12)はtiretと丸括弧を伴う発話の例を分析し、tiretに「(...) le tiret ne semble pas avoir d'usages propres. Dans tous les cas où le tiret est possible, la parenthèse l'est aussi.」と述べている⁽⁹⁾。しかしながら、本論では、一・一で述べたように、tiretが導く挿入句の与える情報は、丸括弧がもたらす情報よりも物語の理解また物語の提示方法にとって有用であり効果的である場合があると考える。tiretがもたらす情報は削除すると情報不足のため読書の理解が困難なまたはより浅いものになる可能性がある。ある重要度の高いものである。また、一・一でtiretを伴う挿入句は小文字で始まるものや、接続詞etで始まるものが多いということを指摘したように、それが組み込まれている発話との結びつきが強く、依存度が高いと言える。このことから、tiretが導く挿入句はそれを含んでいる発話と連続性を持ち、強く結ばれていることが多いと考える。それに反して、丸括弧に挟まれた挿入句は、語り手が発話を一旦止めて、コメントや説明を挿入しているような印象を生むのではないだろうか。すなわち、丸括弧の場合は発話と挿入句の間に一時的な断然が生み出されているかのようだということである。もちろん、どちらの場合もtiretや丸括弧を用いて句が挿入されているのは書き手の意図に基

tiretを用いた挿入句をめぐって

metを用いた挿入句をめぐって

づいてであることは明らかであるが、直前に置かれた表現や発話と挿入句の関係性が異なるのである。三.において、物語のテキスト中で用いられるmetを伴う挿入句と丸括弧付き挿入句を語りの声、つまり物語を構成する発話が誰の主観から表されているかという点から比較し、ここでの結論をさらに発展させたい。

三. metを伴う挿入句と物語における語りの声——丸括弧付き挿入句との比較——

物語のテキストを構成する発話に反映されている声、つまりどの意識主体の主観から表現されているかという点から考えると、物語を創造する作者、物語の語りを作者から委ねられた語り手、そして物語世界の内部の存在である登場人物を主に想定することができる。一般的な小説などの物語のテキストの場合、作者は物語中に姿を表すことはないが、物語全体がその意図を基盤に創り上げられている。語り手も一般的には物語世界の外に視点を置くことが多い、その主な役割は物語世界で起こる出来事や状況を客観的に語ることである。物語を構成する発話の中で語り手に属するのは語りの文（地の文）である。また、物語世界の内部に存在するのが登場人物であり、直接・間接話法の被伝達節や自由間接話法の発話においてその主観が語り手を通さず表現され得る。ここではまず、物語のテキストにおいて、metが導く挿入句をなす表現や発話がどの意識主体の主観を反映しているかを、挿入句を含む発話の基盤となる主観も考慮に入れながら考察したい。さらに、後半では物語のテキストにおいてもmetが導く挿入句と類似していることが明らかな丸括弧付きの挿入句と比較することによってその役割を明らかにしてゆきたい。

一. に挙げた（1）から（9）までの例のうち、（9）以外は全て物語の語りの文中で用いられている挿入句の例

であり、挿入句である発話は全てそれを含む発話と同様に語りの文の一部であると解釈されるものである。すなわち、発話とその内部に埋め込まれた挿入句の間に語りの声に関する断絶は見られない。(9)は、一・でも述べた通り、非常に興味深い例である。この例では、tiretに挟まれているのは登場人物に属する自由間接話法全体ではなく、文頭に置かれた間投詞、Non^oのみである。その直前の発話 (Mme Lefèvre se pencha pour écouter si aucune bête ne gemissait.) は語り手に属する語りの文であるが、この直前の発話と一つ目の tiret の間には句点があることから、ある種の断絶が見られる。この挿入句が密接に結び付けられているのは、直後に続く小文字で始まる、Non^o en avait pas : Pierrot serait seul. の部分であり、挿入句である Non^o とこの部分は連続する一つの自由間接話法の発話である。語りの声という点では、この例においても、tiret が導入する挿入句とそれを含む発話の間には断絶を感じることがなく、同じ登場人物の主観が基盤になっていると言える。一・で引用した例は、(9) 以外は語りの文に結び付き、さらにそれ自体も語りの文に属すると解釈される tiret を伴う挿入句であるが、次の (17)、(18) が示すように、物語のテキストではこの種の挿入句が話法、その中でも特に直接話法の発話中で用いられているのは珍しいことではない。

- (17) * Mon fils, avait dit le gentilhomme gascon — dans ce pur patois de Béarn dont Henri IV n'avait jamais pu parvenir à se défaire —, mon fils, ce cheval est né dans la maison de votre père, il y a tantôt treize ans, et y est resté depuis ce temps-là, ce qui doit vous porter à l'aimer. Ne le vendez jamais, laissez-le mourir tranquillement et honorablement de vieillesse, et si vous faites campagne avec lui, ménagez-le comme vous tiret を用いた挿入句をめぐって

tiretを用いた挿入句をめぐって

ménageriez un vieux serviteur. À la cour, continua M. d'Artagnan père, si toutefois vous avez l'honneur d'y aller, honneur auquel, du reste, votre vieille noblesse vous donne des droits, soutenez dignement votre nom de gentilhomme, qui a été porté dignement par vos ancêtres depuis plus de cinq cents ans. Pour vous et pour les vôtres — par les vôtres, j'entends vos parents et vos amis —, ne supportez jamais rien que de M. le cardinal et du roi. C'est par son courage, entendez-vous bien, par son courage seul, qu'un gentilhomme fait son chemin aujourd'hui. (...)*

(Dumas, A., *Les trois mousquetaires*)

(18) — Mais non ! c'est bien naturel.

— Non ! Non ! ce n'est pas naturel — pour moi, — parce que je ne veux pas fauter, — et c'est comme ça qu'on faute, cependant. Mais si vous saviez ! c'est si triste, tous les jours, la même chose, tous les jours du mois et tous les mois de l'année.”

(Maupassant, G. de, “Le père” in *Contes du jour et de la nuit*)

(17) に引用した部分では主人公ダルトニヤンの父親の発言が直接話法を用いて表されている。この例に引用した部分には *tiret* に導かれた挿入句が二箇所埋め込まれている。一つ目の挿入句はこの直接話法の導入説 (avait dit le gentilhomme gascon) に付加されている。直接話法の被伝達部はこの登場人物の発言を物語世界で実際に発せられたとみなされるままの形で引用しているので当然登場人物に属すが、導入説は語り手に属している。そして、*tiret* が挿入されている前置詞句 (dans ce pur patois de Béarn dont Henri IV n'avait jamais pu parvenir à se défaire) が

その内容から、ダルタニヤンの父親がその発言をしている様子をより生き生きと読者に感じさせるために、語り手が父親がベアルン方言を話していることを述べている語りの文である。二つ目の *Eret* を伴う挿入句は、その直前に “*Pour vous et pour les vôtres*” という前置詞句があり、その最後にある “*les vôtres*” という表現がこの文脈で何を指しているかを挿入句（— *par les vôtres, j'entends vos parents et vos amis* —）を用いて説明していると解釈できる。

この挿入句を含む発話全体はダルタニヤンの父親の台詞の一部であり、挿入句を内部に含む発話自体と挿入句の間にはその基盤となる意識主体に相違はない。ここでは、一つ目の挿入句が含まれる発話全体は語り手に属し、二つ目は登場人物に属するという違いはあるが、*Eret* が導く挿入句がそれぞれが結びついている発話と同じ意識主体の主観を基にしているという共通点を挙げることができる。(18) では二つ目の直接話法において *Eret* を伴う挿入句が連続して二つ用いられている。この二つの挿入句はその直前の発話 (*Non ! Non ! ce n'est pas naturel*) に対してその発話者である登場人物が付け足した情報であり、一つ目（— *pour moi*）では直前の発話の内容が自身に限定されることであること、二つ目（— *parce que je ne veux pas fauter*）ではなぜ直前の発話内容のように考えるかという理由を述べている。語りの声という点で見ると、この例の *Eret* を伴う二つの挿入句も、(17) の二つ目の挿入句の例と同様に、直接話法でその発言が表されている登場人物が自身の発言の中で、一旦発言の流れを止めて、用いた表現の詳細や説明を付け加えたり、理由を付け加えたりしていることが分かる。これらの直接話法の被伝達節で伝えられる登場人物の発言は、当然実際の会話で用いられた発言の再現ではなく、物語世界で登場人物によって発せられたと読者によってみなされるべきものである。そして、実際の会話では当然書き言葉における記号である *Eret* は存在しないので、物語のテキストの直接話法や自由間接話法の被伝達節に現れる *Eret* には語り手、ないし語り手を操る書き手に

Eret を用いた挿入句をめぐって

Etetを用いた挿入句をめぐって

よる操作が表れていることが読者にとっては明白である。このような場合、Etetを話法の被伝達節で用いることは、あたかも登場人物がまるで現実世界の会話のように自らの発言の中で言い直しをしたり、情報を後付けしたりするような印象を読者に与え、物語世界や登場人物をより近くに、生き生きと感じさせるために書き手が用いる手段であると考えられるだろう。また、(17)、(18)と上で言及した自由間接話法の発話で用いられるEtetを伴う挿入句の例である(9)が示すように、話法が用いられている発話の被伝達節での挿入句においては、それを含んでいる発話と同じ意識主体の主観から表現されており、つまりその間に語りの声に関しては断絶、交代が見られることはないと言える。このことに関しては、一、二で観察した物語の語りの文や雑誌、新聞という一般的なテキストに現れるEtetが導く挿入句においても同様である。すなわち、Etetは語りの声の断絶や交換のマーカースとして用いられないのである。しかし、次の(19)の例を見ると、必ずしもEtetを伴う挿入句がその前に置かれた発話や表現と同じ意識主体から表されているとは言えないことがわかる。

- (19) Il répondit : « Vous croyez que j'vas apporter mes cordes, mes manivelles, et monter tout ça, et m'n aller là-bas avec mon garçon et m'faire mordre encore par votre maudit quin, pour l'plaisir de vous le r'donner ? fallait pas l'jeter. »

Elle s'en alla, indignée. — Quatre francs ! (Maupassant, G. de, « Pierrrot », in *Contes de la Bécasse*)

この引用部分では、強欲な女主人が番犬として飼い始めた犬に4フランの税金がかかることを知って憤慨するとい

うシーンが描かれている。この例の最後で *triet* によって導入されている挿入句（— *Quatre francs* —）はこのテキストにおいて *Eite* で示されている主人公の思考が彼女の憤りと共に表されている自由間接話法の発話であると解釈される。しかし、その直前に置かれた発話（*Elle sen alla, indignée.*）は語り手が単純過去を用いてこの主人公の取った行動を語る語りの文であることから、挿入句と直前の発話の間には語りの声の連続性がなく、異なる意識主体の主観から表されている。この例と上で語りの声の点で連続性が見られるとした例を比較すると、この例の場合挿入句とその前に置かれた発話の間には *point final* があり、相互に完全に独立した発話であることが分かる。ここでは、*triet* を伴う挿入句が他の発話に統語的に依存していない独立したものである場合は、語りの声の点でも独立しており、必ずしも直前の発話と同じ意識主体の主観から表現されるわけではないということが言えるのではないだろうか。この例と同様に、一・で引用した（8）でも *triet* を伴う挿入句は他の発話の内部に埋め込まれておらず、大文字で始まる独立した発話である。この例では直前の文も挿入された発話も語りの文であるので、（19）のように語りの声の変換は見られない。しかし、*triet* が導く挿入句は別の発話に結び付けられていることから非自立的なものであることが多いが、（8）と（19）が示すように、*point final* で区切られて独立して用いられることが可能で、その場合は自立性が高いことが分かる。さらに、（19）のような例があることから、*point final* で直前の文との連続性が断絶されている場合、語りの声についても前後の発話と連続性が必ずしも見られるわけではないということも特性として挙げることができる。

次に、三・において観察した語りの声に関する *triet* が導く挿入句の特徴は、二・で言及した物語のテキストにおける先行する発話・文脈との関係性に関する相違点に加えて、一見挿入句を導入する *triet* と類似した役割を持つと

triet を用いた挿入句をめぐって

irectを用いた挿入句をめぐって

考えらえる丸括弧との違いをさらに示すものであることを明らかにしたい。

田原 (2019) では、フロベールの *Madame Bovary* で用いられている丸括弧付き挿入句を分析したが、語りの文と直接話法の発話に現れる丸括弧に挟まれた挿入句の多くは、irectを伴う挿入句と同様にそれが埋め込まれた発話が反映するのと同じ意識主体の主観を表していることが分かった。しかし、その中には語りの声の点で同質ではない発話が丸括弧を伴って挿入されている場合があることも明らかにした。

- (20) Quelques-uns encore (mais ceux-là, bien sûr, devaient dîner au bas bout de la table) portaient des blouses de cérémonie, c'est-à-dire dont le col était rabattu sur les épaules, le dos froncé à petits plis et la taille attachée très bas par une ceinture cousue.

(Flaubert, G., *Madame Bovary*, 田原 (2019: 10) に于て引用)

(20) では、語りの文の内部に組み込まれている丸括弧に囲まれた挿入句は、その前に置かれた *Quelques-uns* で指示されている人達 (ここでは主人公エマの結婚式の招待客の中のある人達を指す) について語り手がコメントを付け加えていると解釈することができる。ここで注目すべきは、それが挿入されている発話も含めた通常の語りの文では語り手は客観性を貫き自らの意見を明らかに表したりすることはないので普通であるのに反し、この挿入句は明らかに語りの文であると解釈できるがその中にモーダルな表現 *bien sûr* と *devaient* が含まれていることである。この二つのモーダルな表現に反映されている主観が語り手のそれであることは明らかである。ここから、田原 (2019)

では、このような例に関して、語りの文においては通常稀である語り手自身の推測や確信などの主観的な表現が丸括弧の中では一時的に許可されると述べた。次の(21)は直接話法の被伝達部に現れる丸括弧付き挿入句の例である。

- (21) * Du reste, disait l'apothicaire, l'exercice de la médecine n'est pas fort pénible en nos contrées ; (…). Le thermomètre (j'en ai fait les observations) descend en hiver jusqu'à quatre degrés, et, dans la forte saison, touche vingt-cinq, trente centigrades tout au plus, ce qui nous donne vingt-quatre Réaumur au maximum, ou autrement cinquante-quatre Fahrenheit (mesure anglaise) , pas d'avantage !

(Flaubert, G., *Madame Bovary*, 田原 (2019: 14) に於て引用)

この例は登場人物オメーの発言が直接話法で表された長い台詞の一部である。この引用の中には二つの挿入句が丸括弧を伴って現れている。一つ目の挿入句はその直前の名詞句 *Le thermomètre* に関するオメー自身のコメントであり、これも直接話法であるということが一人称主語「*je*」と複合過去が用いられていることから分かる。つまり、挿入句もそれを含む発話も同様にオメーの発言を再現したものである。それに反して、二つ目の挿入句は登場人物の主観から表されている直接話法の台詞の中に、語り手による発話が含まれていると解釈するのが妥当であろう。この挿入句では、フランスでは普段用いられていなかった *Fahrenheit* という温度を示す英国で用いられている単語に読者が持つであろう疑問に答えるために語り手が解説を挟んでいるのだ。ここでも異なる意識主体の主観が一つの発話の中に丸括弧付き挿入句を用いて表現されている。次はより複雑な例であるが、やはり丸括弧が登場人物の主観が基盤

titre を用いた挿入句をめぐって

tiretを用いた挿入句をめぐって

になっている文脈の内部に語り手の声を表す語りの文を挿入している例である。

(22) (...) une ambition sourde le rongeat : Homais désirait la croix.

Les tirets ne lui manquaient point :

1° Sêtre, lors du choléra, signalé par un dévouement sans bornes ; 2° avoir publié, et à mes frais, différents ouvrages d'utilité publique, tels que... (et il rappelait son mémoire intitulé : Du cidre, de sa fabrication et de ses effets ; plus, des observations sur le puceron lanigère, envoyées à l'Académie ; son volume de statistique, et jusqu'à sa thèse de pharmacien) ; sans compter que je suis membre de plusieurs sociétés savantes (il l'écrivait d'une seule).

— Enfin, secrétait-il, en faisant une pirouette, quand ce ne serait que de me signaler aux incendies !

(Flaubert, G., *Madame Bovary*, 田原 (2019 : 19) に於て引用)

まず、この例の冒頭で登場人物の薬屋のオメーにはレジオン・トヌール勲章を受章するという野望があることが分かる。二つ目の発話の初めに置かれた「Les tirets ne lui manquaient point :」という発話は形式的には語り手が物語世界での事実を伝えている語りの文であるとも解釈できるが、読者はそれ以降の部分の内容によりこの解釈が妥当でないことを理解するだろう。冒頭の部分で述べられているように（つまり、オメーがその勲章をもらう資格がある」と）の二つの根拠が「1、2」に続いて名詞句として解釈される動詞の不定法を用いて挙げられている。そして、1

と²に挙げられたそれぞれの根拠の後に丸括弧付き挿入句が埋め込まれている。これらの挿入句以外の部分、つまり根拠が述べられている部分を見ると、直接話法の伝達部 (*il pensa* : など) がないにもかかわらず、“mes”と“je”の二箇所一人称代名詞が現れ、さらに“je suis (membre)”^{*}では現在形が用いられている。文脈からこれらはオメーが自分自身を指示するために用いた人称代名詞であり、現在形はオメーにとつての、つまり物語世界での現時点を指示していることが明らかである。田原 (2019) では、これは語り手の介入なしにオメーの主観が直接的に表現された一種の自由直接話法であり、また、直前の「Les titres ne lui manquaient point」も語りの文ではなく、オメーの思考を直接的に表す自由間接話法であるとした。この文脈で使われている丸括弧付き挿入句を観察すると、オメーの思考の中に丸括弧を用いて巧みに語り手の声が組み込まれていることが分かる。一つ目の挿入句では、一種の自由直接話法を含む直前の発話と異なり、オメーは三人称主語^②で示されており、時制は半過去が用いられている。この点でこの発話は語りの文の特徴を備えている。自由間接話法でも三人称主語、半過去が用いられるが、この発話の内容、また、特に文末にある「et jusqu'à sa thèse de pharmacien」には、*jusqu'à* という表現の選択に「本来なら業績に入れるまでもないだろう卒業論文」までも」という語り手の皮肉が込められていると解釈できる。すなわち、この発話では普段は客観性を貫き自らの存在を感じさせない語り手の主観性が例外的に感じられるのである。このことからこの丸括弧の中にある挿入句は語り手に属する語りの文であると考ええる。次に、二つ目の丸括弧付き挿入句^③ (*était d'une seule*) に関しては、一つ目の挿入句で感じられた語り手の主観がより明らかに現れていると考ええる。この挿入句を含む発話では、オメーが自身が複数の学会の会員であることをレジオン・ドヌール勲章に値する根拠のひとつとして挙げているが (*je suis membre de plusieurs sociétés savantes*)、丸括弧付き挿入句においてそれに反す

^② *titre* を用いた挿入句をめぐって

metを用いた挿入句をめぐって

る物語世界における事実（実はオメーは一つの学会にしか所属していないこと）を全知の語り手が読者に対して暴露しているのである。以上のことから、この挿入句の内容は、オメーの思考の一部だと解釈すると先行する文脈と矛盾してしまうが、ここに矛盾を感じることから読者はこれを語り手に属するものだと解釈できるのである。ここでは、丸括弧があるからこそ、この場面ではオメーの心の内が直接的な方法で表されているなかに、普段とは異なり自らの主観を感じさせながら語る語り手を感じる語りの文が複雑に組み込まれることができるといえよう。

以上で見たように、物語のテキストに現れるmetが導く挿入句と丸括弧を伴う挿入句は、それ以外の環境で用いられる場合と同様に、読者の理解を円滑にしたり、挿入句なしでは発話が伝えられない情報を付加することによって情報伝達の構造を複雑にするという役割を持っていることが分かる。しかし、統語的に用いられ方が類似したこの二つの種類の挿入句は、物語のテキストで用いられた場合に、どの意識主体の主観が挿入句が埋め込まれた発話と挿入句の発話に反映されているかという点、つまり語りの声に関しては相違点があることも明らかになった。挿入句を含む発話が反映している意識主体の主観とは異なる別の意識主体の主観を表すことや、普段は中立性を保ち自らの主観から表現しない語り手が語りの文に丸括弧によって挿入された発話においてはモーダルな表現を用いて自らの主観を表現することが可能である丸括弧付きの挿入句とは異なり、metが導く挿入句は統語的にある発話に依存している場合には語りの声の点では自立していないことを実例の分析から見取ることができた。このことから、本論では、metにはそれが導入する挿入句がある発話に依存している場合語りの声の面で発話との間に断絶を生じさせる機能は備わっていないと考える。つまり、metは語りの声の面ではそれを含む発話と挿入句の間に連続体を形成するものであるということを観察することができた。

四. おわりに

本論では、物語のテキストで用いられる *Frame* を伴う挿入句を中心に、主にどのような要素が挿入句として現れるのか、そして挿入句がその直前の語や発話とどのような統語的または情報上の関係を持ちうるのかという点から観察した。

Frame によって導かれた挿入句が伝える情報は、確かにそれが埋め込まれた発話の伝える情報に何らかの関連性を持って「付け加えられた」ものであることは確かであるが、それは単にあってもなくても大差のない削除可能な情報ではなく、発話者（物語のテキストの場合作者）が受け手（読者）に有用な情報をさらに与えたり、受け手が発話またはテキストを発話者が意図する方向で円滑に理解するように促すような情報を与えたりしているという点で、比較的重要度の高いものである傾向を認めた。また、情報としての重要度が認められない場合でも、*thet* は挿入句の内容を目立たせて、他の情報より強い印象を持って読者に提示するという役割を果たしていることが分かった。挿入句の内容の重要度やその役割については、他の方法で埋め込まれる挿入句のそれとの相違点を含めて、より多くの異なる環境で用いられた実例を分析する必要があると思われるので、今後の課題としたい。また、ここで述べた *thet* に導かれる挿入句の持つ読者の目に情報が飛び込むように、いわば目立たせるための機能については、丸括弧付きの挿入句との間の相違点であると考えることができ、この点については、今の段階ではさらなる実例の比較をする必要があることから、この点も今後の課題としたい。

thet を用いた挿入句をめぐって

tweetを用いた挿入句をめぐって

また、田原 (2019) において物語における丸括弧についても述べたことと同様であるが、tweet自体について考えると、それが物語の読者にとって目に見える形で何らかのメッセージ、または発話者（作者）の何らかの意図を伝えるものであると言うことは明らかだと言えるだろう。ある発話や発話中のある要素に統語的または内容的に依存して現れる挿入句は、本論で扱った書き言葉で用いられるものだけではなく、話し言葉においても認められるが、話し言葉における挿入句では、発話者が発話の最中に言い直し、新たな情報や自身のコメントの付け加えなどをその場で自発的に行うものである。⁴この点で、書き言葉における挿入句は異なっており、その場で発話者の咄嗟の判断でテキストに埋め込まれるものではなく、作者が何らかの効果をあげようという意図を持って用いているということが言える。さらに、Eguchiや丸括弧自体は、そこに作者の編集という介入があり（つまり、中立的な立場を貫く語り手の裏で物語世界を実際に創造する存在の作者が例外的に介入する）、文体的な選択を見取ることができる。また、そこで読者が読み取る作者の意図としては、読者の理解にさらなる有用な情報を提供するということが認められる。さらに、上で述べたように、丸括弧には見られない働きとして、挿入句を導くtweetには発話が伝える情報を作者が強い印象を伴わせて提示したいと意図しているという情報を伝える働きもあるのである。以上のことに加えて、テキストというより大きな単位を考慮に入れると、挿入句を用いることにより様々な種類の情報を階層的に分類し、より複雑な情報の構造を持たせることができるということも言える。

本論で考察したtweetも含めて、挿入句の物語のテキストにおける役割に関しては、他の種類の挿入句も視野に入れ、挿入句が埋め込む情報の物語の筋に対する重要度や語りの声に関する特性などに関するさらに大きなスケールでの研究を今後の課題にしてゆきたい。

注

(1) Berrendonner (2008 : 21) は主に口語フランス語における挿入句を分析し、その特性に関して「Avec elles (=les parenthèses) on tombe sur des configurations périodiques qui s'avèrent sensibles à une espèce bien particulière d'informations partagées : des attentes de réactions de l'allocutaire.” (括弧は筆者が加筆)と述べている。さらに「挿入句の機能として次の二つを挙げよう。

(i) soit parce qu'elles remédient au déclenchement d'une inférence malencontreuse, (ii) soit parce qu'elles préviennent et tentent d'inhiber une réaction indésirable de l'allocutaire. (Berrendonner 2008 : 5)

本論では、いくつかの例で用いられている tiret の役割として「読者が持ちこたえる疑問に先行して答えることよって疑問を解消し、読者の発話理解を円滑にする」と述べるが、この特性は Berrendonner (2008) が認める口語における挿入句の上記の二つの機能にのみなるものでもなく考えらる。

(2) Grevisse & Goose (2016 : 146) は tiret の二つを「Comme les parenthèses, deux tirets servent à isoler de la phrase certains éléments : mais à la différence des parenthèses, les tirets peuvent mettre en valeur ce qu'ils isolent.」と述べて、次の例を挙げている。

Un autre homme est debout devant la bibliothèque, un peu à l'écart, les mains dans les poches – une espèce de voyou. (Robbe-Grillet, Gomme, Grevisse & Goose (2016 : 146) からの引用)

Grevisse & Goose (2016 : 146) のこの言及は本論が論じている tiret を伴う挿入句の意味のテキストにおける重要度に通じるだろう。

(3) しかしながら、François (2011: 17) は tiret と異なり丸括弧だけが持つ統辞的な機能があるとして次のように述べている。La parenthèse peut marquer tous les éléments de la chaîne écrite, de la simple lettre à plusieurs phrases, alors que le tiret ne marque que des segments supérieurs ou égaux au mot (graphique) et inférieurs ou égaux à la phrase. その二つ、次の文章で丸括弧に限られた用法の二つを例として挙げよう。

L'été est la saison privilégiée pour partir à la (re)découverte du patrimoine touristique de la Belgique.

tiret を用いた挿入句をめぐって

tiret を用いた挿入句をめぐって

(Metro Summertime, n o 609, 01-05/08/2003, p. 16, Guillaume (2011 :16 による引用))

(4) Blakemore (2008: 1) は、話し言葉にならび用いられる挿入句について Wichmann (2001) を引用し、次のように述べた。⁵²⁾

Research on the communicative function of parentheticals has tended to focus on spoken discourse and has largely assumed that the parenthetical material is assumed to be an example of a 'disfluency' that characterizes unplanned discourse. (...). Such disfluencies, claims Wichmann (2001) are 'evidence that speakers have trouble planning their utterances, but are constrained by interactional principles to keep talking' (Wichmann 2001:189)

参考文献

- Berrendonner, A. (2008) "Pour une praxéologie des parenthèses", *Verbum* XXX, 2008 (1), 5-23.
- Blakemore, D. (2008) "Parentheticals: disfluency or stylistic choice?", Workshop on pragmatics and style, Middlesex University, 16, July 2008.
- Doppagne, A. (1978) *La bonne ponctuation : clarté, précision, efficacité de nos phrases*, Duculot : Paris.
- Grevisse, M. & Goosse, A. (2016), *Le bon usage*, 16^e édition, De Boeck Supérieur : Louvain-la-Neuve.
- François, G. (2011), « Étude comparée du fonctionnement des parenthèses et des tirets », *Discours* [En ligne], 9 (URL : <https://journals.openedition.org/discours/8542>, 閲覧へアクセス 2019 年 10 月 21 日)
- Wichmann, A. (2001) "Spoken parentheticals". In Aijmer, K. (Ed.), *A Wealth of English*. Gothenburg University Press, Gothenburg. 171-193
- 田原 ともみ (2019) 「Madame Bovary における丸括弧付き挿入句の語用論的考察」『明学仏文論叢』(2) 1-37.